障害者教育・福祉学研究
第９巻，pp.　１～５（２，2013）

携帯・ネット依存とIPT（対人認知課題）の関連について

飯　塚　一　裕（障害児教育講座）

要約　本研究では，携帯・ネット依存とIPT（Interpersonal Perception Task,対人認知課題）でみた社会的感受性との関連を検討するため，大学生を対象にケータイネット依存のチェックリストとIPTを集団的に実施した。その結果，携帯・ネット依存性の高い者は，IPT得点が低いことが明らかになった。また，性差についての検討を実施したところ，男性については携帯やネットへの依存度が高い者は非言語的感受性と社会的感受性が低くなっており，女性については，携帯やネットへの依存度と非言語的感受性，社会的感受性との間には関連がないという結果になった。依存性とIPTとの関連性の性差が何を意味するか検討することが，今後の課題として挙げられた。

キーワード：携帯・ネット依存，IPT，社会的感受性

１．問題と目的

最近，携帯やインターネットへの依存に関する報道がよく目につくようになった。

例えば，「中高生約１万８千人を対象にした大規模調査で，夜間，消灯後にメールや通話のため携帯電話を使う頻度が高いほど，心の健康状態が悪い傾向がみられるとの結果を，東京都医学総合研究所の西田淳志主任研究員（精神保健学）らのグループがまとめ，27日までに英国の専門誌に発表した（山陰中央新報，平成24年10月28日）」。「インターネットやオンラインゲームに熱中しすぎて人間関係の構築や日常生活に支障をきたすネット依存症が話題となって久しい。厚生労働省からの補助で研究機関などが実施した調査2008年では依存の恐れがある人は国内で271万人に上るとの推計結果が出た。スマートフォン（高機能携帯電話）の普及で一層の増加も懸念される中，現場では治療や研究が進む（読売新聞，平成24年11月30日）」などである。

また，携帯やインターネット依存に関する研究も多い。インターネット（以下ネットと略記）は現実社会における社会行動にどのような影響及ぼすかについて，Kraut, et .al.,（1998）はインターネットパラドックスという研究を行っている。すなわちコミュニケーションのために用いられたインターネットが現実生活における対人関係や社会行動を阻害していたという，パラドックスが示されたのである。 人と人をつなぐはずのインターネットが身の回りの対人関係を後希薄化していたという可能性がこの研究からも示された。インターネットの中毒性や依存性に着目した立場からもRosen（2012）はインターネットなどのテクノロジーに強く魅了され昼夜問わずネットに貼り付き現実生活を破たんさせてしまった人々の実例を報告している。そして，テクノロジーとの関係が人間の精神に深刻な影響を及ぼしているとして，これをiDisorderとよんでいる。例えば，注意力が阻害され，ADHDの特性を持つ人が示す行動と似た行動を示すようになるという。

魚住（2005）は寝屋川市を中心に東京，大阪，長崎で3555人の中学生とその保護者を対象に，より詳細に様々な角度からメディアに依存する子どもたちの実態を調べている。長時間ゲームやネットに浸る子どもとあまりしない子どもを比較して，前者の特性としてこの調査結果は次のような点を指摘している。対人関係における消極性，人付き合いや集団が苦手，対人不信感や基本的信頼感の貧しさ，共感性や状況判断力の不足，人の気持ちはわかりにくく周囲とずれてしまうことがあるゲームで長時間遊ぶ子に共感性や状況判断力の問題が生じやすく通示しているまさに社会的な能力の獲得のつまずきが長時間ゲーも仕事で深く関係していることが統計的に確かめられている。ゲームやネット依存などのメディア依存は，社会脳の機能を低下させ，健全な発達を損なうことも示唆されている。乳幼児期のテレビ，メディア漬けが自閉症と見分けがつかない状態を引き起こすという小児科医らの報告もある（2007）。

さてArcher（1980）は，人々の行動，感情状態，人々の関係性などを解釈する能力を社会的知能(Social Intelligence）としている。共感能力に優れた人々など人心を熟知した人たちが持つと想定される人間と人間関係に関わる実際的な能力のことである。この能力を測定するため，Constance & Archer（1989）は，IPT（Interpersonal Perception Task, 対人認知課題）を作成した。これは，非言語シグナルに含まれている手がかりを観察し，それを的確に捉え，人間行動や関係性を推測する課題（テスト）である。IPTビデオは，欺瞞，親密性，地位，親子関係，競争の５領域を含む15の場面（各場面は約２分間）を収録したビデオテープである。各場面にはいろいろな言語，非言語的手がかりがあり，これによって種々の人間関係がどのようなものかを解読させる。

携帯・ネット依存性の高い者は，IPT得点が低いこ

とが予想される。そこで，本研究では，携帯・ネット依存とIPT（対人認知課題）でみた社会的感受性との関連を検討する。

２．方法

参加者：大学生184名（男子学生83名，女子学生101名）
手続き：
　ケータイネット依存のチェックリストとIPTを教室で集団的に実施した
　また，29名の学生に携帯やネットへの利用状況を自由記述で求めた。

１）ケータイネット依存のチェックリスト

　魚住（2005）は８項目よりなるゲーム，ネット依存のチェックリストを作成している。これはゲームネット依存の簡単なスクリーニングテストである。本研究ではゲームをケータイに置き換えて使用した。項目は以下の通りである。
①ケータイやネットができないことで，イライラしたり，落ち着かなくなる。
②家族や友人と過ごすよりも，ケータイやネットを優先することがある。
③ケータイやネットに熱中しすぎて，学校（仕事）のことがおろそかになったことがある。
④時間を決めてやろうとして，守れなかったことがある。
⑤やりすぎて，夜が遅くなったり，朝が起きられなくなったことがある。
⑥していることをごまかしたり，ウソをついたことがある。
⑦やりすぎて，手や目や頭や腰などが痛くなったり，体調が悪くなったことがある。
⑧止めさせようとしたら，怒り出したり，暴言，暴力になったことがある。
　各項目について，よくある，時々ある，あまりない，全くない，の４段階で答える。よくある，を２点，時々ある，を１点として合計得点を求め依存症スコアとする。時々あるが１項目でもあれば要注意，4項目以上つまり得点が４点以上を依存レベルと判定する。

２）IPT教示：

「これから見てもらうビデオは人々が他者の行動の印象をどのように形成するかを調べる目的で作られたものです。いろいろな人間関係の場面を15ほど約20分間見て頂きます。各場面についてそれぞれ１つの質問が提示されるのでこの質問に対する正しい答えを選択肢から選んでください。一つ一つの場面を全部見終わってから回答してください。場面と場面の間は約６秒間です。」
　なお，質問項目は以下の通りである。
①２人の大人の子どもは誰ですか。
②男性と女性はどういう関係ですか。
③この２人は同じ職場で働いています。上司はどちらですか。
④同じ女性が２つの場面に現れます。どちらが嘘をついていて，どちらが本当のことを話していますか。
⑤１対１のバスケットボールの試合で，どちらが勝ちましたか。
⑥男性と女性はどういう関係ですか。
⑦自分の上司に話しているのはどの場面ですか。
⑧ラケットボールの試合でどちらが勝ちましたか。
⑨２人の女性は，それぞれ誰に向かって話していますか。
⑩どちらが嘘をついていて，どちらが本当のことを話していますか。
⑪この２人は同じ職場で働いています。上司はどちらですか。
⑫フェンシングの試合でどちらが勝ちましたか。
⑬女性は電話で誰と話していますか。
⑭２人の子どもの父親はどちらですか。
⑮どちらが嘘をついていて，どちらが本当のことを話していますか。

３．結果

　まず，携帯やネットへの依存状況を学生の自由記述の中からいくつかあげてみる。

男子学生の携帯・ネット使用状況例：
　１．自分では携帯電話に依存していないつもりでもネットを閲覧していると気づくと１時間以上経っていることがあります。特に平日に多く利用し暇な時間があれば自分の好きなページに行って情報を得ている。常に携帯電話が手の届く位置にありますが，その生活が当たり前になって煩わしいと感じる事はなくむしろ快適になっている。ネットで買い物をしたり趣味のランニングのペースメーカーの役になったりとその機能は様々である。もし携帯電話がない生活に戻ると言われても考えられないのかもしれない。２．私は現在携帯とタブという使い方をしているがはっきり言ってケータイ依存症である。昔はつながるために使用していたが，メールがなくて孤独を感じたりしていた。今は暇があればケータイ小説読んだりゲームをしたりしている。３．ケータイは必ずズボンのポケットに入っており手放すことができず，なくてはならない必要不可欠なものである。利用状況としては，いろいろな人との連絡，いろいろな情報取得，フェイスブックを通じて他者との交

流や情報交換，ケータイゲームなどを通じての他者との交流，などを行っている。今では必ず身に付けていないといけないものになってきており，携帯依存になっているようだ。４．ケータイは常に手の届く場所に置いている。メールなどは急用なものでもあればすぐ返答するようにしている。ケータイはコミュニケーション手段としてもとても大切なものと感じている。ケータイがなくなれば誰とも連絡が取れず孤独になってしまうかもしれない。それほど重要なものである。

女子学生の携帯・ネット使用状況例：

１．いつメールが入るのか習慣的に意識するようになり常に持ち歩いている。仕事や授業以外は肌身離さず持ち歩き，目の届くところになければ落ち着かない。それでもメールチェックは頻繁に無意識のうちに行っている。２．私はケータイを毎日持ち歩いている。携帯は高校の時からずっと使用しており，お金を持たずに外出すると不安なようにケータイを持たずに外出すると不安になる。３．ケータイはいつもそばに置いてあります。４．私は携帯電話を持っていないと不安である。そのため寝る時も必ず枕元に置いており，時々ケータイを使い過ぎて眠れなくなることもある。５．いつもケータイは手の届く範囲に置いている。

次に，男女を込みにした携帯やネットへの依存とIPTの分布を図１と２に示す。

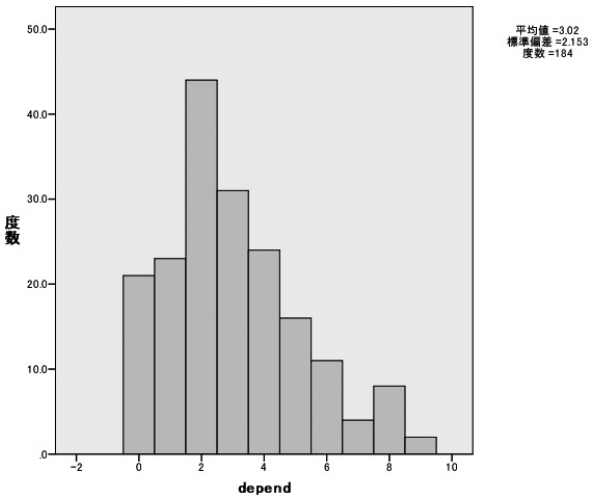

図１　携帯，ネット依存得点分布

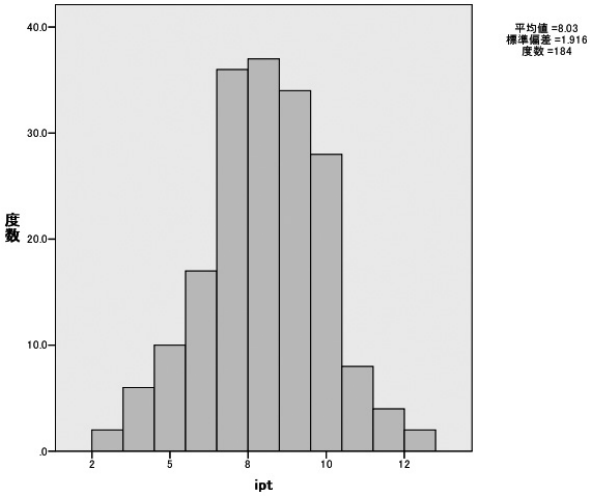

図２　IPT得点分布

また，依存性の男女別の分布（図３，４）とIPTの男女別の分布（図５，６）も示す。

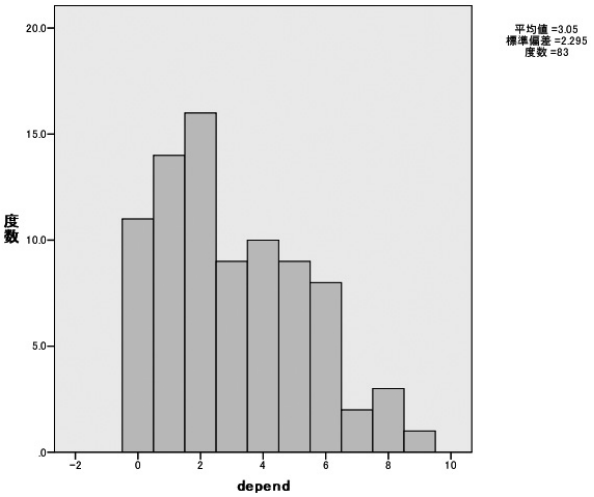

図３　携帯，ネット依存得点分布（男性）

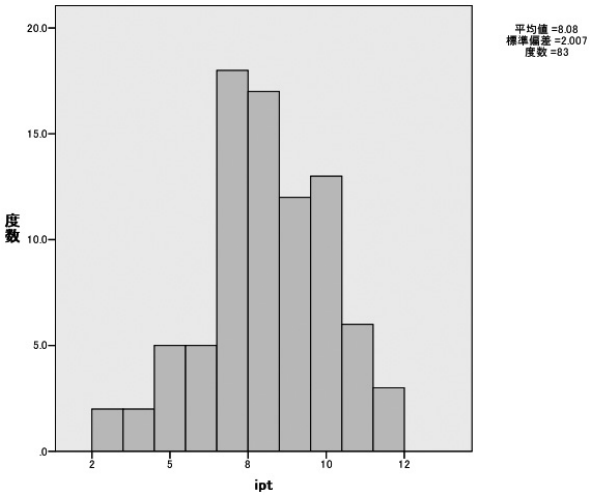

図４　IPT得点分布（男性）

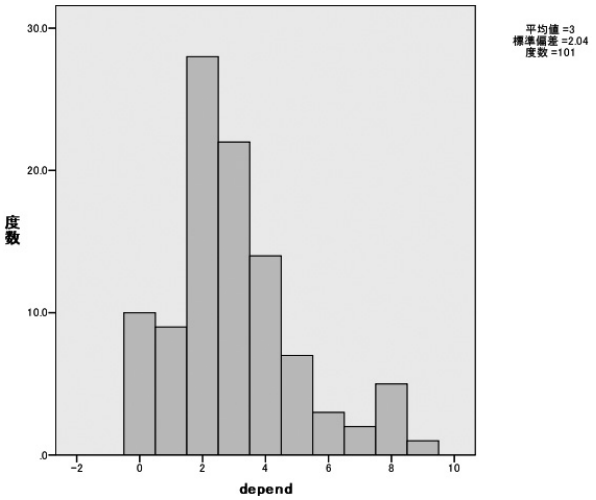

図５　携帯，ネット依存得点分布（女性）

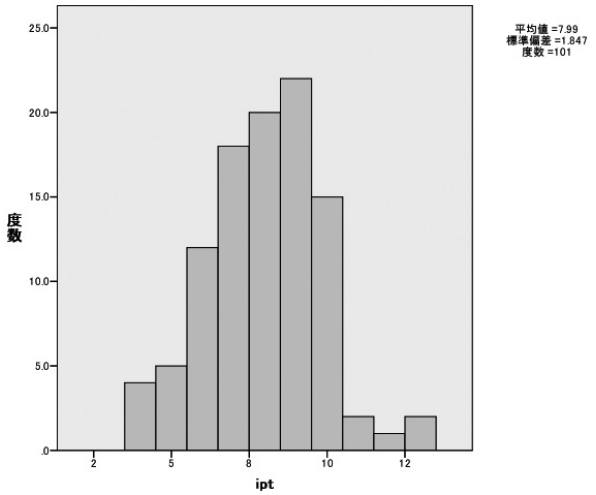

図６　IPT得点分布（女性）

次に，IPTの性差，依存性の性差も検討した。これによるとIPTについて男女の差は有意ではなかった（男性；M = 8.08, SD = 2.01; 女性 M = 7.99, SD = 1.85, t(182) = .33, ns）。また依存性についても男女の差は有意ではなかった（男性；M =3.05, SD = 2.30; 女性 M = 3.00, SD = 2.04, t(182) = .15, ns）。

次に依存性とIPTとの相関をピアソンの相関係数によって算出した。－.158となり有意な負の相関が得られた（p< .03）。次に男女別の相関係数を算出した。男性については依存性とIPTとの相関係数が－.321となり有意な負の相関となった（p< .003）。しかし女性については .005となり両者の間に相関はみられなかった。そして，この２つの相関係数は有意に異なっていることが示された（p< .026）。

４．考察

携帯やネットへの依存状況についての学生の自由記述はRosen（2012）の指摘とも呼応している。彼は，世界の1100の会社の3500人以上の研究（2011）で，61%が寝室まで，携帯を置いており，そのうちの4/10以上が手の届くところに携帯を置いていたと報告している。

携帯やネットへの依存分布（図１）によると，得点が０，依存傾向を認めない人は10人（5.4%）であった。つまり，９割以上の参加者になんらかの依存症状が認められることになる。

IPT得点については性差が報告されている。一般に女性のほうが男性より得点が高いとされている（Constance & Archer, 1989; Smith, Archer & Constance, 1991）。Iizuka et al.,（2002）も女性が男性より得点が高くなったことを報告している。Hall（1985）は，非言語行動の解読研究展望の120のうち80%が非言語的感受性は女性のほうが高いとしている。しかし，本研究では性差がみられなかった。

男性については依存性とIPTとの有意な負の相関となった。つまり，携帯やネットへの依存度が高い者は非言語的感受性，社会的感受性が低くなっていた。しかし女性については，両者の間に相関はみられなかった。つまり，携帯やネットへの依存度と非言語的感受性，社会的感受性との間には関連がないという結果になった。そして，この２つの相関は有意に異なっていることも示された。依存性とIPTとの関連性の性差に関する研究はほとんど見あたらない。茂木（2006）は脳科学の立場から，共感性の男女差を示唆している。つまり，「共感の回路には，男女差があるらしい。他人が痛みを感じているのを見ると，観察者の脳の前頭葉にある前部帯状回が活性化する。ここは，自分が痛みを感じたときにも活性化する部位であり，他人の痛みを思いやる共感回路の一部をつくっていると考えられる。ところが，男性の脳に限って，相手が「公正さ」に欠ける人間だと感じていると，共感の回路の活性が下がり，その代わりに側座核と呼ばれる部位の活性が上がっていることが明らかにされた。側座核は，脳の中でよろこびを感じる際に活動する部位である。「卑怯なやつには少し痛みを与えて復讐だ」とばかり，脳が満足感を覚えているらしいのである。一方，女性の脳では，相手がたとえ卑怯な人間でも，その痛みに対する共感を支える回路の活動は低下しなかった。」

依存性とIPTとの関連性の性差が何を意味するかは，今後の研究を待たねばならないだろう。

付記）本研究の計画及び実施にあたり，飯塚雄一氏（島根県立大学）に助言を頂きました。ここに記して感謝の意を表します。

引用文献

Archer, D.（1980）. How to Expand Your S.I.Q. New

York: M. Evans and Company.
（工藤力・市村英次（共訳）（1988）ボディ・ランゲージ解読法 誠信書房

Consatanzo, M., & Archer, D. (1989) Interpreting the expressive behavior of otheres: The interpersonal perception task. *Journal of Nonverbal Behavior*, 13, 225-235.

Consatanzo, M., & Archer, D. (1993) The interpersonal perception task-15（videotape).

Hall, J.A.（1985）Male and female nonverbal behavior. In A.W.Siegman & S. Feldstein (Eds.), *Multichannel Integrations of nonverbal behavior* (pp.195-225). Hillsdale, NJ: Erlbaum.

Iizuka, Y., Patterson, M., & Matchen, J.C.（2002）Accuracy and confidence on the interpersonal perception task: A Japanese-American comparison. *Journal of Nonverbal Behavior*, 26 (3),159-174.

Kraut,R.,Patterson,M.,Lundmark, V.,Kiesler,S.,Tridas., M.,& Scherlis,W.(1998) Internet paradox: A social technology that reduces social involvement and psychological well-being? *American Psychologist*, 53, 1017-1031.

茂木健一郎　2006　すべては脳からはじまる　中央公論新社　Pp.193-194

岡田尊司　2007　脳内汚染からの脱出　文藝春秋社

Rosen, L.（2012）*iDisorder*. New York: Palgrave Macmillan.